

漫々録

瀬川負太郎

朝まで生テレビ

以下敬称を略す。

朝まで生テレビ「人権と部落差別」のビデオをやつと見終えたが、一言でいえば野坂昭如と小森竜邦の掛け合いが中心であった。野坂の立論は「人間は差別する存在だ」という認識をたてまえに、解同の糾弾路線を非難するかと思えば「全解連は解同の揚げ足を取って国民の機嫌を取っている」など、およそ支離滅裂の言いたい放題である。しかし言論の自由を保障するという前提の企画であるから、解同も「差別だ、糾弾だ」と騒ぐわけにもいくまい。

司会の田原総一朗が「言葉狩り」を討論の導入部に据えたのは、部落問題をめぐる状況のドラシックな側面を押えたものだった。このため野坂のほか評論家の西部邁、元読売の大谷昭宏、大島渚が表現の自由に対する糾弾を批判、大島らが「本人を糾弾せず、所属する団体や局の上部を糾弾し、上から指導するというのはファシズムだ」と述べたのは、解同の糾弾スタイルを的確に言い得ている。

そうした批判に対する反論で小森らが引き合いにする差別事例にはどうもマユツバが多い。

西部が「四つ葉のクローバーが糾弾の対象になった」と言えば小森は「先入観だ。ワンスリーという言い方もある」と「新造語」を紹介しておったが、あれはどういうつもりなのか。

全同教の寺沢亮一は生徒の作文を取り上げ、歴史の時間で士農工商が出てくると教師が「え、た非人、こいつらは犬だ。人間以下のドレイの一種だ」と言つたという。これは六年前の話という但し書きつきだが、さすがに会場からは「信じられん」という声が出た。

また宗教教団連帯会議の泉十次は、親戚の十三回忌に出たら住職が「この家は血筋が良く、だから資産もあり、良い学校にいき教育も高い」と言い、泉が差別だと指摘したら青くなつて謝った。「差別意識は解消しつつあるというが実態はこうしたもの」と得意だ。青くなるのは

泉が糾弾を背景にもの言っているからだ。長野の娘が愛媛県に嫁いで自殺したなど、三十年も前の話を持ち出し、最近の事実と誤認しかねない発言など言語道断である。

差別の現状はかくも厳しいと言いたいのだろうが、鬼面人を驚かす引用が、事実かどうかこの場で確かめようもないことを無責任に放言しておる。同和行政の制度施策二十年、これじや行政も運動も何もしてこなかったことになる。部落差別の背景が変わりつつあることは、地域改善対策研究所の森朴繁樹も認めた。

東京国際大の稲葉三千男が糾弾について「全解連も解同も差別用語は文脈で捕え、糾弾はしないという点で一致した」と小森に確認を求めると「そうだ。徹底的に確認しよう」という声が上がリ、小森の「断言できな

いが努力しよう」という返事に野坂が「全然統制力がない」とやじつたのには笑っちゃまった。

しかし『部落解放』誌九月号で小森が、このテレビ番組を取リ上げ「部落差別解消の取組として、糾弾闘争は有り得べきものだという全体の合意を作り出す契機になった」と書いているのはウソツパチである。むしろ全体の流れは「糾弾はやめるべき」であった。その意味ではこの番組は、解同の手を多少でも縛ったことになる。

それにしても全解連の丹波正史、部落問題研究所の鈴木良にはどうもイライラさせられた。パネラーがわれさきに発言をとって、カンカンガクガクを展開しているのに、この二人は腕を組んでニヤニヤ笑っておって、機軸で見物とでもいう態度だった。発言回数は田原、野坂、小森、西部にくらべて問題になら

ず森朴よりも少なかった。二人が、エセ同和の横行は糾弾と結び付いた利権あさりにあると追及、北九州市の土地転がしを取り上げたのは大変よかった。しかし小森が「土地転がしというが部落の土地業者が土地売買をやって何が悪い。直方では土地転がしと書いた朝日が謝った」と開き直つたのに対し、反論がないままゴチャゴチャになつてしまつた。

土地転がしは業者がやったわけではない。れっきとした解同幹部が行政を糾弾で威嚇し、二十億にのぼる不当利得を得たもので、刑事訴追こそ逃れたが国税庁による追徴課税によって事件が裏書きされたものだ。小森の言い分では解同幹部が業者になつておる。

ああいう場所は紳士的態度で座っておつたのでは発言はまわつてこない。言つたが勝ちであ

る。糾弾をやめろという立場からは解同幹部が自ら差別落書きをしていた篠山町、高知・小笠原教諭の問題や広島・八次小の事件などいくらでも材料にはとかなない。それを取り上げてギャーギャー言わないものだから、ある程度小森ペースに乗つてしまつた。

もうひとつ、分かりにくかつたのは「部落差別は解消の過程にある」という論である。これを丹波が言つたとき、一瞬だがシラケた雰囲気生まれた。解消の過程にあるということは、問題解決の条件が成熟している事実を指すが、これを「解消の過程」と簡単にくくつてしまふと、解同のやつておることを承知の人々は、マサカということになるだろう。実際、差別だ糾弾だと騒いでいる事実を横において「解消の過程」で多数の納得は得難い。

全解連は「差別解消を遅らせているのは解同だ」とハッキリ言つておる。部落問題解決の条件が成熟し、かつてなく展望が開けているにも関わらず、これを阻害しているのが解同、エセ同和の糾弾、利権あさりである事実について、もっと言い回しに工夫はないものかと思つたことである。

番組の終わりで、住井するゑが「共産党、社会党という政党の立場で運動を共にできないというのは愚の骨頂。国内で分裂しているようでは国際化といつても悲観する」と述べたのは問題を誤解させるものである。こんな訳知りが一番困る。

司会者はこの番組を今回だけではなく、またやるといつていたから、そのときは国民融合の領域から元気のいいパネラーを出して、糾弾路線を粉碎してほしいと思つている。